

「全人類皆殺し大作戦-中編-」

—初稿—

2025/6/8

脚本 太郎

〈人物表〉

春野 紡

(15)

中学三年生

霧崎 宴

(15)

中学三年生。殺人犯

霧崎家・霧崎の私室

整然とした、物が少ない部屋。

春野紡（15）、椅子に座っている。霧崎宴（15）、足を組んでベッドに座っている。

春野 「で？ 全人類皆殺し大作戦とは何ぞや？」

霧崎 「うん、君もさつき言ってたようにさ、日本のお巡りさんって優秀だからさ、わたしみたいな馬鹿なガキの犯行なんてすぐ突き止めちゃうわけじゃん」

春野 「自覚あったんだ」

霧崎 「じゃあ、世界中の人間を皆殺しにしちゃえば誰もわたしを裁けなくない？」

春野、呆れた顔。

春野 「いや話滅茶苦茶飛んだな」

霧崎 「警察がわたしを追いかけるなら警察を皆殺しにすれば良い」

霧崎、親指を折る。

霧崎 「その後に自衛隊とかが来るならそいつらも皆殺しにすれば良い」

霧崎、人差し指を折る。

春野 「怪獣かよ」

霧崎 「政府も、民間人も、他の国の連中も。もちろん親も、兄貴も、学校の奴らも、近所の人たちも……」

霧崎、台詞内の主語に応じて一通り指を折ったり開いたりした後、強く拳を握りしめる。

歯を食いしばって深い憎悪の表情を浮かべる。

霧崎 「わたしを尊重しない世界の人間なんて皆殺しにしてやれば良い」

春野、少し驚いた顔。

春野 「なんか自分が捕まらないためというよりは、何もかも憎くて全人類殺したいみたいに聞こえるけど」

霧崎、我が意を得たりといったように笑う。

霧崎 「確かにそれもあるよ。……いやメインかも。まあ全人類殺すとは言っても、わたしたちみたいな境遇の人は除外

してあげようかなとは思ってるけどね」

春野、苦々しげに、

春野 「正直それでも無謀だと思うよ」

霧崎 「なぬ」

春野 「じゃあ訊くけど、何で一件の完全犯罪すら不可能だったのに、世界中の人間が殺せると思うわけ？」

霧崎 「だってその二つは並列の関係じゃないもの」

春野 「どう違う？」

霧崎 「完全犯罪には知性が必要。でも殺人の件数を上げるためには、パワーあるのみ」

春野 「パワー？」

春野、先ほどのことを思い返すように目を動かして、
「確かに足は速かったけど、そんなに体力に自信が
ありで？」

霧崎 「違う違う。憎悪パワー」

春野 「憎悪パワー……」

霧崎、足を組み替えて得意げに、
「相手にバレてようが何だろうがエネルギーさえあれば殺し続けられる。理論上ね」

春野 「何の理論だよ」

霧崎、少し考えるそぶりを見せる。

霧崎 「いや、理論は語弊があったかな。こういうのは理屈じゃないもんね」

霧崎、さらに少し沈考して、

立ち上がり、

霧崎 「ねえ、ちょっとわたしのお腹触ってみ」

春野 「え、何急に」

霧崎 「良いから良いから」

霧崎、胸を張る。

春野、身を引くような仕草。

春野 「何か嫌だ」

霧崎、溜息をついて、

霧崎 「じゃあ致し方ない」

自分で自分の腹部を触る。

そしてうつとりとした様子で、

霧崎 「あのね……今日一人殺したのに、まだまだこの中にたくさん満ちてるの。溢れ出そうなくらい」

霧崎、軽くえずいてみせる。

春野 「何も出さなくて良いからね」

霧崎 「君もさっき言ったでしょ？ 何もかも憎いんだろって」

霧崎、ナイフを取り出して、刃を魅入られたように見つめる。嗤う。

霧崎 「分かるんだ。今のわたしなら、きっと、無限に人が殺せるよ」

僅かに沈黙。その間春野、無表情に霧崎を見ている。やがて春野、どこか憐れむように言う。

春野 「……それ錯覚だよ」

霧崎、不服そうに春野を睨む。

春野 「憎悪への陶酔とアドレナリンが見せる幻影……卒業するなり逮捕されるなり引越すなりして連中や家族と会わなくなればそのうち忘れるよ」

霧崎、納得いかない様子で春野に詰め寄る。

そして再び自分の腹に手を当てて言う。

霧崎 「そんなわけない。こんなに生き活きた熱、忘れるわけない」

春野、少し霧崎の持つナイフを怖がる様子を見せながらも言い返す。

霧崎 「そう思ってるのは今だけだよ。いじめられっ子の反抗心なんてたかが知れてるんだから」

霧崎、一転してきよとんと、

霧崎 「……まるで自分も経験したことがあるかのような言い方だね」

春野、目を逸らす。

再び僅かな沈黙。

霧崎 「そっか。君は途中で冷めちゃったんだ」

春野 「……幸い、殺人なんて馬鹿げたことを仕出かすより前にね」

霧崎 「うーん……じゃあき、殺すかは置いといて」

霧崎、再びベッドに座り、足を組む。

霧崎 「抗う気はまったくないの？ 殺意が冷めたとしても、いじめられた憎悪が全部冷めきるだなんて思えないんだけど」

春野 「無理だつて。残念だけど、向こうが多数派である時点でどれだけ綺麗事を並べてもいじめる側が正義なのは明白なんだ。まともな人間からしたらぼくらみたいにまともじゃない人間は、」

霧崎、眉を顰めて足を組み替える。

春野 「まともじゃないというだけで罪人で無限に害意をぶつける権利があると思ってるんだから。大多数の人間からのよってたかつての本気の悪意に一人二人で対抗できるわけない」

霧崎 「その理屈めっちゃ納得できないけど」

春野 「じゃあ君は世の中を分かってないな」

霧崎 「悪かったね」

春野 「確かに敢えて言葉にすると違和感があるけど、感覚としては世の常識だよ。大体いじめ当事者のくせに、何で今更こんなことに疑問を抱くの？」

霧崎 「いじめられっ子担当の自覚はあるけど、納得してるわけじゃないから。今日は君とこういうこと話してみたいってのもあつて呼んだんだよね」

霧崎、微笑むと、促すように手を振り、

霧崎 「それで？ 何でいじめは起こると思うの？」

春野 「人は加害に飢えていて、異端や劣等はそれだけで大義名分になるから」

霧崎 「それだけ？」

春野 「まああとはなんか、狩猟本能とかそういうのも働いてるんじゃないかな、知らんけど」

霧崎 「うーん……そういう眠い話は置いてき、相手が劣ってるのが攻撃する大義名分になるなんておかしいと思うんだよね、道義的に」

春野 「道義って……人を動かすのは道義より摂理だろ」

霧崎 「でも人って建前がないとビビるじゃん。てか大義名分云

々言い出したの君だし」

春野、顔を顰める。

春野 「あーもう……そうだな……」

春野、目を瞑り、少し悩ましげな様子で、虚空に指で何かを描くような仕草をしながら言葉を探す。

春野 「多分あれだよ、馬鹿でどんくさくて誰にでもできる簡単なことができない、ぼくらみたいに普通より一定以上劣っている人間というのは、」

霧崎、ナイフの刃を覗き込むようにして考えている様子。

春野 「きつと無自覚に、普通の人たちが共有している何か大切な理念みたいなものを冒瀉しているように思われてるんだよ」

春野、目を開ける。

春野 「きつとそれが『ルールを破ってる悪い奴をやっつけろ』みたいな、正義感じみた建前に繋がってるんだ」

霧崎、感心した様子で皮肉めいた笑みを浮かべる。
「へえ、なるほど。それならありそう。四面楚歌っつーか生きてるだけで犯罪者っつーか。やっぱりわたしたちが悪者なんだ」

春野 「これも感覚的な話だけど、弱さと悪を結びつけるのって根拠がなくともかなり自然に受け入れられる考え方だと思う」

霧崎、そこで身を乗り出して両手を（右手はナイフを持ったまま）大きく広げてみせ、

霧崎 「世界中みーんなそう思ってるのかな？」

春野、目の前で振られるナイフに迷惑そうな視線を向けながら、

春野 「君だつて自分が周りより劣っていて、四方八方、そここそ世界中みーんなから鬱憤を排泄されてるような自覚があるから、全人類を殺すなんて言い出したんじゃないのか？」

霧崎 「あれ、思ったよりわたしのこと分かってくれてる感じ？」
春野 「多少は理解してるつもり。ただ肯定はしない」

霧崎 「そりやどうも。でもそれなら、いじめっ子も湧いて出てくるはずだから憎悪パワーも尽きることはないと思うけど」

春野 「これ以上変な精神論に付き合いたくないからそれにはノーコメントで」

霧崎、挑戦的な笑み。

霧崎 「弱腰だね」

霧崎、右手で低くナイフを掲げ、春野に問う。

霧崎 「じゃあ君はさ、正しくないわあたしたちが、正しい人たちと向き合うにはどうすれば良いと思うの？」

霧崎、左手で足に頬杖をつくど、どこか期待を込めた眼差しを春野に向けている。

春野、ぶっきらぼうに、

春野 「下を向いて、できるだけ申し訳なきそうな顔をして彼らの断罪をやり過ごすしかない」

霧崎、呆氣に取られた様子で、

霧崎 「いやそれ向き合っていないじゃん」

ナイフを下ろす。

霧崎 「え何？ やられっぱなし？ 本当の本当に反骨精神ゼロ？」

春野 「致し方ない。正しい人たちに抗うのはリスクが高すぎる」

霧崎、失望したような顔で露骨に溜息を吐くと、ナイフを仕舞う。

霧崎 「糞みたいな答え」

春野、不機嫌そうに顔を顰める。

春野 「さっきから何だよその態度は。人を一人殺したくらいで偉そうに」

霧崎も少しムツとして、

霧崎 「確かに今は一人だけど、将来的にはほぼ全員殺すって言うってんじゃない」

春野 「だからそんなこと無理に決まってるって言うてるんだよ」

霧崎、再び溜息。

天井を仰ぐように、

霧崎 「残念。君は、わたしと同じだと思ったんだけどなあ」

春野 「違うよ。一緒にするな……君なんかと」

霧崎、春野を睨む。

春野、霧崎の手元を神経質な目線で伺いながらも、続ける。

春野 「ぼくは君よりは自分客観視できてるし、全人類皆殺しな

んて馬鹿なこと考えない」

霧崎 「言ってくれるじゃん」

春野 「ぼくは自分なりの、無理のない留飲の下げ方を知ってるから」

霧崎、鼻で笑う。

霧崎 「へえ。どう下げるのかな？ やられっぱなしなんじゃないの？」

春野 「常に自分より下の、より正しくない者が存在することを意識してる」

僅かに躊躇した後、

春野 「例えば学校では、ぼくは底辺かもしれないが最底辺じゃない。最底辺は君だ」

霧崎 「は？」

霧崎、無表情。

続く